

季報

二松学舎大学附属図書館 Quarterly Report

- P2 コロナ禍と図書館 押野 洋
- P3 新入生にお薦めの本 飯田幸裕 / 麻生 将
- P4～5 西村天囚書簡の紹介 町 泉寿郎
- P6 二松学舎創立 145 周年記念企画展 大学資料展示室
書評キャンパス
- P7 越後長岡の地に建つ三島中洲撰文の碑
- P8 横溝正史の名作誕生の謎に迫る
——『オンライン版横溝正史旧蔵資料』という手がかり
山口直孝

No.115

2023(令和5)年3月

コロナ禍と図書館

附属図書館長

国際政治経済学部 国際政治経済学科 教授

押野 洋

新型コロナウイルスのパンデミックが始まってから3年になるが、コロナ禍を個人的に意識するようになったのは2020年3月16日の学位授与式のことであった。国際政治経済学部では、学生を学籍番号順にいくつかのグループに分けて学位授与式を行った。それ以前は中野サンプラザで卒業式を行い、学位記は九段校舎のゼミ担当教員の研究室で授与するという形をとっていたのだが、コロナ元年の2020年は九段1号館202教室で一律に学科主任から授与されたのである。学位記授与の後、卒業生たちが研究室に集まってくれたものの、密閉を避けるためドアを開放したままでは、残念ながら別れのあいさつ程度しかできなかった。「青春ってすごく密」と仙台育英高校野球部の須江監督は2022年夏の甲子園大会優勝インタビューで語っていたが、大学生活も節目では密であるべきなのである。今般のコロナ禍は「三密回避」や「ソーシャルディスタンス」といった言葉とセットで、今後記憶されることになるのであろう。

では、コロナ禍で図書館は何をしたのだろうか。オンライン授業が実施され、学生は校内立ち入り禁止となり、図書館も閉館となったが、学修支援のために無償で宅配便による本の貸し出し・返却サービスを行った。その後、開館が可能となったからも、利用者数の上限設定と時間を区切ったの入れ替え制というように、利用には大幅な制限を課した。そして次の利用時間までの間に図書館のスタッフが机と椅子の消毒をした。図書の貸し出しは、図書館HPのマイライブラリからの連絡を通してカウンターで本を手渡しする。これらをすべてスタッフに対応していただいたことを考えると、コロナ禍で図書館業務は確実に増えたと言う事ができる。

通常の開館ができない中、最も懸念されたのは新生へへの図書館案内をどうするかである。例年、4月から5月にかけて両学部とも基礎ゼミナール単位で20分ほど図書館のスタッフによる図書館ツアーを行っているのだが、コロナ禍では、オンライン授業が主となり学生が登校しないのでこれは

できない。そこで急遽、「学部1年生必見」と題して「ようこそ ラーニング・コモンズへ（学習スペース）」と「二松学舎大学附属図書館九段（館内案内）」の二本の動画を作成し公開した。が、ネット空間にそれなりに親しんでいる学生たちでも、図書館案内はゼミ仲間と一緒に生身のスタッフから直接受けたほうが良いのであろう。動画のアクセス数を見ても新入生が積極的に見てくれたという事はなかったようだ。

コロナ禍の図書館を考えた場合、これまで以上に求められるのは電子化であろう。今後、何らかの事由により非開館を余儀なくされたとしても電子図書館が充実していれば、図書の利用という点でそれほど問題とはならないだろうし、本学の図書館が恒常的に抱えている書架や閲覧室の狭隘さも問題にならなくなるからである。千代田区内の大学に在学している本学の学生ならば誰でも利用可能なのが「千代田区 Web 図書館」である。2023年1月現在、日本でもトップクラスといえる10,285点の電子書籍を所蔵しており、本学図書館のモデルケースになるであろうと思われる。もちろん電子図書館もメリットばかりではない。一番の問題は電子書籍の点数の少なさであり、さらには電子書籍のライセンス取得には紙の本の数倍はかかるという費用の問題である。本学の図書館の限られた予算では、電子書籍にあてる費用はそれほどないのが現状だ。

ただし、はっきり言えるのは、デジタル教科書で学んだ生徒たちが近い将来、大学に入ってくるということである。その時には図書館も今の姿では対応できないであろう。デジタル教科書世代の学生に適した図書館とはどうあるべきか、この問題を考える切っ掛けとなったのが今回のコロナ禍であった、と振り返る日もそう遠くはないと思われるのだが。

最後になりましたが、よりよい図書館にしてゆきたいとスタッフ一同考えていますので、図書館に対して忌憚のないご意見等お聞かせいただければ幸いです。



国際政治経済学部国際政治経済学科 教授 飯田 幸裕

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。大学生活という観点から、3冊を紹介いたします。

①『人は聞き方が9割』

著者：永松茂久
発行所：すばる舎 2021年 1,540円

大学生活の中では「聞き方」がとても重要と思います。授業、就職活動、日常生活でも、ぜひ「聞き方」の技術を高め、満足できる成果を手に入れてください。

②『GRATITUDE 毎日を好転させる感謝の習慣』

著者：スコット・アラン（弓場隆訳） 発行所：ディスカヴァー・トゥエンティワン 2022年 1,650円

私たちは、衣食住はじめスマホやゲームなど、自分で1から作っているものは（ほとんど）なく、誰かに生産してもらい、お店で購入します。生活を支えてもらっていることに「感謝」することで、皆さんの生活が充実します。お父さんやお母さん、学費を負担してくれている方に感謝して、大学生活を楽しく過ごしてください。

③『大学の人気講義でよく分かる「ミクロ経済学」超入門』

著者：田中久稔 発行所：SBクリエイティブ 2022年 1,760円

私は国際経済論など経済学科目を教えていますが、著者の田中先生の説明はとてもわかりやすく、楽しく読むことができます。「勉強を楽しむ」のは難しそうですが、せっかくなら楽しく勉強してください。一緒に大学生活をがんばっていきましょう。

文学部歴史文化学科 専任講師 麻生 将

①『共に生きる生活』

著者：ディートリヒ・ボンヘッファー 森野善右衛門訳
発行所：新教出版社 2014年 1,760円

②『被告席に立つ神(C.S.ルイス宗教著作集 別巻2)』

著者：C.S.ルイス 本多峰子訳 発行所：新教出版社 1998年 2,640円

③『悪魔の手紙』(平凡社ライブラリー)

著者：C.S.ルイス 中村妙子訳
発行所：平凡社 2006年 1,320円

①の著者はナチス政権下のドイツで抵抗運動に参加したキリスト教神学者で、②と③の著者は『ナルニア国物語』の作者として有名な人物である。これら3冊は直接的にはクリスチャンの信仰生活への注意と戒めの意味で書かれた内容だが、現代を生きる私たち自身にとって重要な示唆を与えてくれる。

①中に「ひとりであることのできない者は、交わりを用心し」、「交わりの中にいない者は、ひとりであることを用心」せよ、とある。私たちを取り巻く様々な人間関係にも当てはめられそうだ。また、人間が他者（そして神）に対して自分の理想や要求を押し付け、支配しようとする危険を警告する文章がある。

そして②と③の著作は私たちがしばしば陥りがちな思考、思い込み、価値判断を逆説的だが非常に深い洞察をもって示してくれている良書である。

これらの著作は、自分が日々発することばと態度を振り返り、内省する事が常に必要である、と鮮やかに示してくれている。SNSが日常のコミュニケーションツールとなっている現在、面と向かってさえ難しい人間関係が更に複雑化し、(表面的な)言葉で互いに傷つけ、誤解し、支配し、断罪しがちな私たちの姿を振り返るきっかけを与えてくれるだろう。一読をお勧めしたい。

近代の漢学者・ジャーナリスト 西村天囚書簡の紹介

町泉寿郎（本学教授）・陶徳民（関西大学名誉教授）

私たちは科学研究費基盤研究(B)「日本近代人文学の再構築と漢学の伝統—西村天囚関係新資料の調査研究を中心として—」(研究代表者・竹田健二教授)の分担者として、近代の漢学者・ジャーナリストとして著名な西村天囚(1865~1924、本名は時彦)の共同研究に従事している。「日本漢学が近代的学問として再構築された実態を解明する」事例研究として位置づけ、①懐徳堂顕彰、②京都「支那学」との関係、③東大「漢学」との関係、④中国との文化交渉、⑤西洋との文化交渉、の観点から多角的に検討し、西村の学問の全容解明とその儒教思想史上の位置を明らかにしようとするもの。我々の研究活動の一端を紹介する意味から、本学と関西大学に所蔵する西村天囚書簡をここに掲載し紹介したい。

資料1：西村天囚書簡（大正10年〈1921〉7月30日付、市村瓊次郎宛書簡no.231、二松学舎大学所蔵）

新設される(旧制)大阪高等学校(1922年4月開校)の漢文科教授として武内義雄(1886~1966)を推薦し、市村瓊次郎(1864~1947)に関係者への推薦を依頼している。武内は1910年に京都帝大文科を卒業し、1919年から内藤湖南(1866~1934)が懐徳堂に寄附した資金によって中国留学した。西村は武内の大阪高校と懐徳堂の兼勤を希望したが、結果は岩付環(1902年東京帝大漢学科卒)が仙台二高教授から来任し、武内は講師として出講した。武内は1922年8月に東北帝大法文学部が設置されると、支那学講座の初代教授となって仙台に赴任したため、西村が希望した懐徳堂兼勤は不可能となった。

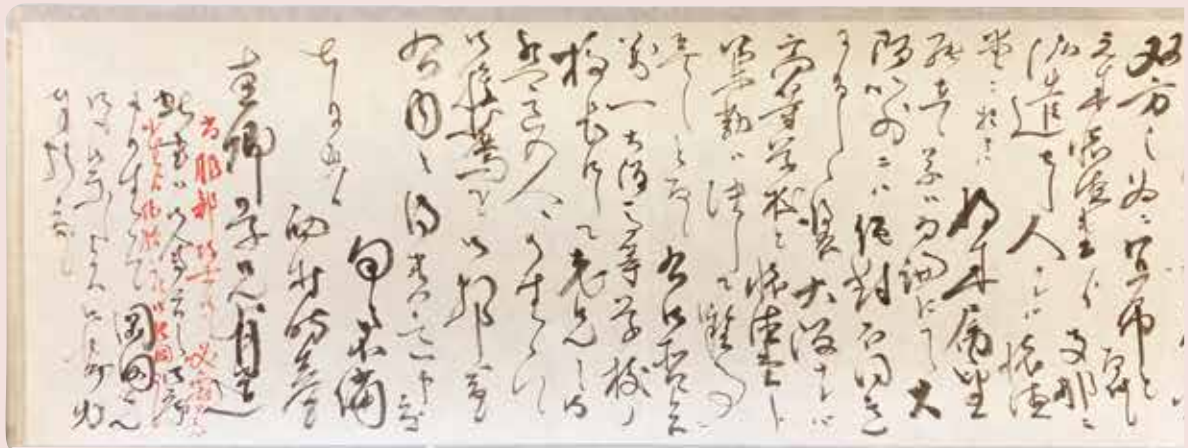
(翻字)「拜啓、暑氣ハ増申候處、御健勝不堪大賀候。小生事、去十五日帰阪、其後無異。御休神可被下候。陳は大阪にもいよゝゝ高等学校設立相成候哉に承及申候。校長ハ何人に確定致候哉、御存知に候ハ、御一報被成下度候。實ハ漢文教授ニ懐徳堂之武内文学士ヲ推薦致度と存し罷在候。同氏ハ支那留学後、懐徳堂ニ講義担当相成居候處、懐徳堂のみにてハ手当も薄く氣之毒ニ有之、大阪之高等学校ニ教授タルヲ得て、而して校長之諒解ノ下ニ懐徳堂講義を担当するやう相成候ハ、双方之為ニ宣布と存付候。元來懐徳堂ハ支那ニ派遣せし人ナレバ、懐徳堂ニ於てテハ将来属望罷在候義ハ勿論にて、大阪以外ニハ絶対不同意に有之候得共、大阪ナレバ高等学校と懐徳堂ト兼勤ハ決して難事ニ無之と存候。右御含被下、萬一大阪高等学校ノ校長にして老兄之御懇意の人ニ御坐候ハ、御推薦を御願申上度候。右内々得貴意申度、勿々不備。七月廿日 西村時彦 圭卿学兄有道
此書ハ御会合之御序も御坐候ハ、岡田兄にも御示し被下、御協力奉願度候。尚、服部博士にも必要アラバ、小生ハ依頼可仕、御指図可被下候。」

資料2：西村天囚葉書（明治40年〈1907〉8月26日付、内藤湖南宛葉書（北京より）、関西大学図書館内藤文庫所蔵）

西村と内藤湖南(1866~1934)は1890年代中期以降、大阪朝日新聞の同僚となり、お互いの学問と人柄を尊敬している。二人の知遇で同社勤務となった後醍醐院廬山(生没不祥)が「群雄割據の中でこの社宝づらがニューと現はれると、そこに文句なしの平和が持来されたもの」だと、1900年前後同社編集陣における内藤の特出した地位を語ったことがある。1907年10月26日内藤が京都帝大文科の東洋史講師に嘱託され(帝大出身者ではないため、二年後に教授昇進)、1916年9月西村も同大の支那文学講師となり、その間に二人は1913年春の京都蘭亭記念会の開催に尽力し、現地寄寓中の羅振玉と王国維も参加した。西村が内藤の欧州遊歴中の1924年7月30日に亡くなり、内藤が帰朝後、「文学博士西村君墓表」を撰書した。能書家の内藤は西村の恩師重野安繹(1828~1910)のためにも碑銘を書した(撰者小牧昌業、東京谷中霊園に建立・陶徳民編著『重野安繹における外交・漢文と国史—大阪大学懐徳堂文庫西村天囚旧蔵写本三種』の扉絵参照)。

北京・頤和園の写真の余白を利用して書かれた本葉書は、1907年8月28日に二か月後の京大着任を控えている「内藤湖南学兄」に郵送された。後醍醐院廬山の長男良正が『西村天囚伝』(上下二冊・非売品)において、同年8月の渡清の目的は、ウィーンで開かれた万国学士院連合会第三回総会と欧州遊歴からシベリア鉄道を經由して帰る恩師重野成斎博士を奉天に迎え、各地視察の随伴をするためであったと伝えている。重野の旅を同伴していた長男紹一郎が「外遊日誌」(大久保利兼編『増訂 重野博士史学論文集』補巻所収)に、3月13日新橋駅出発から9月2日上海到着までのほぼ全行程の詳細を記録しているため、葉書に書かれた北京の様子や、武漢訪問と帰国期日の予定などと照合できる。同日誌の8月24日に「昨日来西村氏腹ヲ損シテ家ヲ出デズ」と、連日の酷暑により体調を崩した西村のことに触れている。

(翻字)「念日入京 念一念二太熱 遂病喝困臥 五日遊覽応酬並疲 憾甚恨甚 今日稍快 擬念八發京赴漢 歸期当在九月十日左右 節過中元 秋意漸動 病軀如蘇 請勿為念 八月念六 天囚生」



▲資料1 市村瓊次郎宛西村天因書簡（1921年7月30日付、本学所蔵）



▲資料2 内藤湖南宛西村天因葉書（1907年8月26日付、関西大学図書館内蔵文庫所蔵）

二松学舎創立145周年記念企画展

大学資料展示室

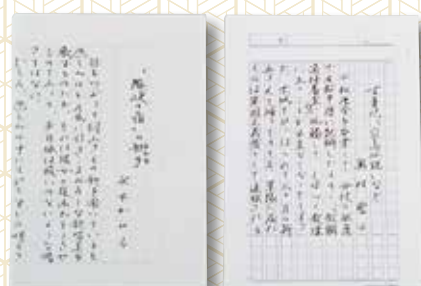
本学は今年度創立145周年を迎え、大学資料展示室では「創立145周年記念」を冠した3回の企画展を実施しました。今号では、前号の1回目、2回目に続き、3回目の企画展を紹介します。

「水木かおる」展

2023年1月23日～3月2日



遺愛品



直筆詩稿

本学卒業生で、「アカシアの雨がやむとき」(西田佐知子)や「くちなしの花」(渡哲也)等のヒット歌謡曲の作詞家として著名な水木かおる(本名・奥村聖二 1926～1998)の詩稿・遺愛品・CD・受賞された数々の賞状や盾等を展示しました。

ヒットした多くの歌のタイトルに花の名が使われているのが特徴的です。「アカシア」「くちなし」「二輪草」など。水木かおるの作詞した歌は、今も色褪せることなく歌い継がれています。



「アカシアの雨がやむとき」表彰状とゴールドディスク

書評キャンパス

本学附属図書館と、千代田区立千代田図書館、週刊読書人の共同企画である「書評キャンパス」が今年度も実施され、下記の学生の執筆した書評が書評専門紙『週刊読書人』に掲載されました。

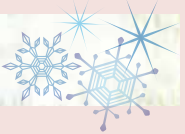
(2023年2月現在)

『週刊読書人』掲載日	書名	氏名
9月30日付(第3458号)	荒井裕樹著『凜として灯る』(現代書館)	文学研究科前期2年 初芝里帆
11月4日付(第3463号)	松本 武著『解説 百人一首』(筑摩書房)	文学部国文学科1年 吉田悠汰
11月18日付(第3465号)	逢坂冬馬著『同志少女よ、敵を撃て』(早川書房)	文学部国文学科3年 福留 舞
11月25日付(第3466号)	珠川こおり著『檸檬先生』(講談社)	文学部国文学科1年 渡辺 楓
2月24日付(第3478号)	角田光代著『笹の舟で海をわたる』(新潮社)	文学部国文学科1年 長田愛唯花

『書評キャンパス at 読書人』(請求記号 019.9-5-2017～2021)には、過去に掲載された本学学生の書評も載っています。こちらも併せてご覧ください。



越後長岡の地に建つ三島中洲撰文の碑



これまで都内の文学散歩を紹介してきましたが、今号では、ちょっと歩を伸ばして、新潟県長岡市にある本学の創立者・三島中洲^{みしまちゅうしゅう}（1831～1919）が撰文した2つの碑を紹介します。碑が建つ悠久山公園は、春は桜が咲き誇る自然公園で、山頂には旧長岡城を模した「長岡市郷土史料館」①が聳えています。

ひとつ目の碑が、「故長岡藩総督河井継之助君碑」②です。河井継之助^{かわいつぎのすけ}（1827～1868）は、長岡藩の中級武士の家に生まれ、16・17歳の頃より陽明学を修めました。20代で江戸に遊学して斎藤拙堂^{さいとうせつどう}（1797～1865）の門に入り、その後古賀茶溪^{こがさけい}（1788～1847）の久敬舎で漢学を学び、一時は佐久間象山^{さくましようざん}（1811～1864）にも師事して海外の事情を学びました。1859年に備中松山藩（岡山県）の山田方谷^{やまだほうこく}（1805～1877）に学び、そこで方谷の高弟・中洲と出会いました。継之助の日記『塵壺』（※1）には、「八月朔日（中略）三島貞一郎（中洲）来る。これは召出されしに付、引移りのためなり。山田の咄を色々致す。」や「廿四日 晴（中略）昼後、先生帰る。後、進・林・三島来る。夜迄談ず。式朱余り出す。酒。」など、中洲と継之助が親交を深めた様子が記されています。戊辰戦争で継之助が戦死すると、当初は師である方谷に撰文が依頼されましたが、「碑文を かくもはづかし 死に後れ」（※2）の句を詠んで辞退しました。その方谷に代わって白羽の矢が立ったのが中洲で、千数百字にも及ぶ碑文を残しました。碑文は『中洲文稿 第二集』に収録されています。

ふたつ目は、「舊長岡藩幸山本義路君碑」③です。山本帯刀^{やまもとたてわき}（義路、1845～1868）は、戊辰戦争で大隊長として奮戦しましたが、24歳という若さで斬首されました。ちなみに、後に連合艦隊司令長官として真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦を指揮した山本五十六^{やまもといそろく}（1884～1943）は帯刀の養子です。帯刀とともに亡くなった長岡藩士・渡辺豹吉^{わたなべひょうきち}の弟である渡辺廉吉^{わたなべれんきち}（1854～1925）が中洲に碑文を依頼したことが碑に刻まれています。篆額は榎本武揚^{えのもとたけあき}（1836～1908）の手によります。この碑文も『中洲文稿 第二集』に収録されています。

また、中洲ではありませんが、園内には二松学舎に関係する人物が撰した碑がもうひとつ建っています。他藩から贈られた飢饉援助米を教育のために使った「米百俵」の逸話で有名な小林虎三郎^{こばやしとらさぶろう}（後に病翁、1828～1877）の「病翁碑」④です。碑文を撰した高橋翠村^{たかはしすいそん}（茂一郎、1854～1944）は、1879年から1881年にかけて二松学舎で学んでいました。その後翠村は、郷里で私塾「静雲精舎」を立ち上げて漢学を教え、1887年からは新潟農学校・北越学館・新潟中学校などで教鞭を執りました。新潟中学校時代の教え子のひとりに歌人・書家の会津八一^{あいつやいち}（1881～1956）がいます。『会津八一全集 11』の「年譜ノート」には「習字は高橋翠邨に学ぶ。成績極めて悪し。」（※3）と記されています。


中洲は多くの人物の碑の撰文を依頼されています。皆さんの地元にもあるかもしれません。探してみたいかがでしょうか。

※1 東洋文庫 257 『塵壺』平凡社 1974年刊 ※2 『山田方谷全集 第一冊』山田方谷全集刊行會 1951年刊
※3 『会津八一全集 11』中央公論社 1982年刊



長岡駅から徒歩8分の場所にある「河井継之助記念館」では、継之助直筆の書幅や書簡などが展示されています。

また、継之助の生涯を描いた司馬遼太郎の小説『峠』が、役所広司主演で2022年6月に映画公開されましたので、興味のある方は、こちらも是非ご覧ください。



横溝正史の名作誕生の謎に迫る

——『オンライン版横溝正史旧蔵資料』という手がかり

文学部国文学科 教授 山口 直孝

日本のミステリーの最高傑作は？ 答えは、横溝正史の『獄門島』である。これは、筆者の独断ではない。作家や批評家に、大々的にアンケート調査を行った結果である（『東西ミステリーベスト100』文春文庫、2013年）。『獄門島』は、名探偵金田一耕助シリーズの第二作、瀬戸内海の小島で起きた見立て連続殺人事件が描かれる。事件の真相には、誰もがあっと驚くであろう。その『獄門島』の貴重な草稿が、本学には102枚所蔵されている。まぎれもなく、これはお宝である。

二松学舎大学には、探偵小説家横溝正史（1902年～1981年）が所蔵していた膨大な資料のコレクションがある。没後に自宅物置で発見された草稿群を出発点として、ご家族のご理解、ご協力の下充実させていったもので、原稿、草稿、ノート、手紙、蔵書、写真、映画関連資料などが含まれる。『オンライン版横溝正史旧蔵資料』は、そのうち正史自筆の資料約14,000枚をデジタル画像化したものである。劣化や損傷を防ぐため、自筆資料の閲覧は制限されることが多いが、本資料は気兼ねなく存分に見ることができる。

『獄門島』が書かれたのは、1947年～48年、アジア太平洋戦争敗戦間もないころであった。物資が不足する中、正史はいろいろな種類の原稿用紙を用いている。ほかの作品の反古の裏に下書きされ、表現に納得がいくまで何度も書き改められながら、『獄門島』は書き継がれていった。作者はどこで立ち止まり、何に悩んでいたのか、調べることで名作の成り立ちの秘密が見えてくる。

本資料は、横溝正史研究に不可欠の、第一級の手がかりであり、ほかにも『本陣殺人事件』、『犬神家の一族』、『八つ墓村』、『仮面舞踏会』、『病院坂の首縊りの家』などの草稿、原稿が含まれている。中にはまだ特定できていない埋もれた作品のものもある。『オンライン版横溝正史旧蔵資料』は、二松学舎大学の学生なら誰でも利用でき、学内ならどこからでもアクセスできる。本資料を手がかりにして、名作の成り立ちをめぐるさまざまな謎の解明に、ぜひ挑んでもらいたい。



編集後記

「季報」115号をお届けします。

今号では、3月発行号恒例の「新入生にお薦めの本」を掲載しました。「新入生」とありますが、学年や学部に限らず、皆さんに読んでいただきたい「お薦めの本」です。図書館にも所蔵していますので、ぜひ手に取ってみてください。

3月の声を聞き、暖かさを感じる今日この頃、お散歩がてら、いろいろな碑を探してみるのも楽しいのでは？ (S・A)

二松学舎大学附属図書館

季報
第115号

発行日 2023年3月25日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

電話：03-3263-6364

柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井 2590

電話：04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ